

第2部 Program & Program note

ヨハネス・ブラームス(1833~1897) Johannes Brahms

ヴァイオリン:河野 由里恵
ピアノ:柳河瀬 貴子

★ヴァイオリンソナタ 第2番 イ長調 作品100 Violin Sonata No. 2 in A major, Op. 100

第1楽章 Allegro amabile
第2楽章 Andante tranquillo
第3楽章 Allegretto grazioso

ブラームスが生涯に残したヴァイオリンソナタは3曲であり、この2番は1886年、56歳の頃の作品である。静養先のスイスで書かれ、その田園的美しさの中での幸福な日々が表されており、穏やかで平和な旋律がブラームスの喜びのメッセージとして凝縮されている。

今日はこの幸せいっぱいメロディーを少しでも伝えられるように演奏できたらと思う。

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685~1759) Georg Friedrich Händel

ソプラノ:金原 聡子
ピアノ:柳河瀬 貴子

★オンブラ・マイ・フ 歌劇「セルセ」より Serse “Ombra mai fu”

従来「ラルゴ」とも呼ばれている。オペラ『セルセ』の第1幕第1場の中のアリア。ペルシャ王セルセ(クセルクセス1世)によって歌われる。下降および上昇旋律を組み合わせた、伸びやかな明るい旋律線を持つ。今日オペラはほとんど上演されないが、この曲は美しい小品として愛され、しばしば演奏される。元来はカストラートが歌っていたが、今日では女声によって頻繁に歌われている。

「こんな木陰は今までになかった 緑の木陰 どれよりも親しく 愛らしく そして優しい」

石川 啄木(1886~1912) Ishikawa Takuboku・越谷 達之助(1909~1982) Koshitani Tatosuke

★初恋

石川啄木の短歌15編に曲をつけて、「啄木によせて歌へる」として1938年に発表した歌曲集の中の第一曲です。この甘美な歌曲は越谷の代表作で、今なお広く愛唱されています。

砂山の砂に
砂に腹這い
初恋のいたみを
遠くおもい出さる日



高野 辰之(1876~1947) Takano Tatuyuki・岡野 貞一(1878~1941) Okano Teiichi

★故郷

作詞高野・作曲岡野のコンビで作られた曲には「おぼろ月夜」「紅葉」「春の小川」「春が来た」など、今なお人々に親しまれている日本歌曲がたくさんある。

そのなかでも、この「ふるさと」は聞いた人々それぞれの故郷を思い出させ、暖かい気持ちにさせる名曲です。

兎(うさぎ)追いし かの山
小鮒(こぶな)釣りし かの川
夢は今も めぐりて、
忘れがたき 故郷(ふるさと)

如何(いか)にいます 父母
恙(つつが)なしや 友がき
雨に風に つけても
思い出さる 故郷

志(こころざし)を はたして
いつの日にか 帰らん
山は青き 故郷
水は清き 故郷

第3部 Program & Program note

ボビー・ティモンズ(1935~1974) Bobby Timmons

ピアノ:風呂矢 早織

★モーニン Moanin

『モーニン』(Moanin)は、ジャズ・ドラマーのアート・ブレイキーが1958年に発表したアルバムの1曲目に収録されている。この曲のみピアニストのボビー・ティモンズが作曲した。彼は牧師の息子で、幼い頃からゴスペルに親しんでいたことから着想したという。ゴスペルのコール・アンド・レスポンスに影響を受けたイントロが印象的で、ファンキージャズの代表曲といわれる。

風呂矢 早織(1977~) Furuya Saori

★夕空(ゆうぞら)

夕方、空を見ながら、一人で車を運転していた。夜を迎える曖昧な時間帯、なんだか、とてもせつない気持ちになった。

ハーマン・フッフフェルト(1894~1951) Herman Hupfeld

★時の過ぎゆくまに As Time Goes By

1931年ブロードウェイ・ミュージカル『エブリバディズ・ウェルカム』(“Everybody’s Welcome”)のために作詞・作曲した曲。戦時中、1942年に公開された映画「カサブランカ」のテーマ曲として一般的に知られている。映画の中でも古い流行歌として取り上げられ、サム役をつとめた、ドゥリー・ウィルソンが弾き語りをしたことで脚光を浴びる。

ジョージ・ガーシュウィン(1898~1937) George Gershwin

★アイ ガット リズム I Got Rhythm

ジョージ・ガーシュウィンはロシア系ユダヤ人の移民の息子としてニューヨークに生まれた。38歳の短い生涯の中でジャズとクラシックを融合させた「ラプソディー・イン・ブルー」(1924年)など数々の有名な作品を発表した。[アイ・ガット・リズム]は1930年、ミュージカル「ガールクレージー」で使われた曲で、今現在も、多くのCMソングでお馴染みである。

ジョージ・ガーシュウィン(1898~1937) George Gershwin

ヴァイオリン:岡田 祐美

★サマータイム・女は気まぐれ 歌劇「ポギーとベス」より

ピアノ:柳河瀬 貴子

Summer Time・A Woman is a Sometime Thing (ヤツシヤ・ハイフェッツ編曲)

フォーク・オペラ「ポギーとベス」は、黒人コミュニティの風俗がリアルに描かれ1935年にオール黒人キャストという意欲的な企画で初演されたが、初演時は反響は得られなかった。のちに評価が高まり、現在ではアメリカ音楽の古典となっている。サマータイムは、オペラの第1幕冒頭で、生まれたばかりの赤ん坊にクララが歌いかけるブルース調の子守唄である。

ヨハネス・ブラームス(1833~1897) Johannes Brahms

★スケルツォ (FAEソナタより) Scherzo Sonate F.A.E. [Frei aber einsam]

スケルツォは、作曲家ロベルト・シューマン(第2、4楽章担当)が友人アルベルト・ディートリヒ(第1楽章担当)とヨハネス・ブラームス(第3楽章担当)とともに作曲したヴァイオリンソナタ(F.A.E.ソナタ)の第3楽章。3人の共通の友人であるヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムに献呈された。曲名のF.A.E.とはヨアヒムのモットーである「自由だが孤独に」(Frei aber einsam)の頭文字をとったものである。ドイツ音名のF・A・Eはそれぞれイタリア音名のファ・ラ・ミに対応し、この音列が曲の重要なモチーフとなっている。

ツェザール・アントノヴィチ・キユイ(1835~1918) Tsezar Antonovich Kiui

★オリエンタル Orientale

ロシア5人組の一人。ヴァイオリンがピッツィカートとアルコでリズムを刻み、これを伴奏としてピアノが東洋的なメロディーを奏で、次にヴァイオリンに引き継がれる。このメロディーはセルビア民謡「明るい太陽」から採られているが、チャイコフスキーやリムスキー=コルサコフなど同時代のロシア作曲家に好まれ、用いられている。

パブロ・デ・サラサーテ(1844~1908) Pablo de Sarasate

★ツイゴイネルワイゼン 作品20 Zigeunerweisen Op.20

非常に派手で劇的なヴァイオリン曲として知られる。題名は「ジプシーの旋律」という意味で、いくつかのハンガリー民謡・大衆音楽の旋律を組み合わせられて作曲されている。